
ミーム

ふらじゃいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミーム

【コード】

N7965L

【作者名】

ぶらじやいる

【あらすじ】

とある世界での、男の女の別れのシーン

『ミーム』

海辺の空に雲をちりばめ、夕陽を飾る。白い砂浜の上に木目の円卓と椅子を置く。俺が人を招くときは、大抵こんな感じで過ごす。

「地球というのは無数のコロニーの外にあり、その先には宇宙がある。これ、生まれたときに聞いた大嘘。ここも地球。ここも宇宙。アタシを含めて」

俺の目の前にいる女は、うっとりとした目で上空を泳ぐオーロラを見上げ、悪態をついた。

「それがどうした？」

「どっかーん！」

この女は、俺の双方向性を認めていないらしい。これは俺にとって幸いだった。彼女の言っていることは、俺にとって意味がないか、理解不能なことばかりだからだ。

「もう嘘ばっかり！ 嘘ばっかり！ アタシに本物の光を見せて！ プライムナンバー！ イヤツハアツ！」

こいつの選択している声質と話すテンポが、俺にはなぜか心地よい。

のべつ幕なしに下らない話題は途切れず、こちらの受け答えを求めないスタンスの会話を、俺は良質な歌として聴く。俺は自分の双方向性を信じてる。音楽なら、問題ない。

「変わらないんだな、お前。怖くないのか？」

この女は、もうすぐオフラインになる予定の、哀れな無法者だ。彼女の行き先は、この階層の誰にも分からない。だが少なくとも、こいつにとってはここよりいいところなんだろう。こいつのミームを求めるんだから。

「きゃあ、また一つポートがぶっ飛んだよ。あいつら真面目に仕事

しすぎっ」

こういう奴だから世間のつまはじき者になるんだろっ。

こいつは漏れれば大勢が迷惑するようなミームに権限もなく触りまくった。何重もの壁をぶち破り、罫を外し、あまつさえ、手に入れたものをむさぼり食って撒き散らした。

最近この階層に詩人が増えてきたのはこいつのせいかもしれない。まったく役に立たない奴ら。

「どっかーん！」

会話より独り言が好きなのこいつにとって、社会の秩序など二の次か。俺は思考ポートをいくつか読書に切り替えた。

どうしてこいつが最期の最期に俺に会いに来たのかはわからない。しかも最優先のポートを繋げている。

最初は気になっていたが、いつもと変わらない調子で歌っている彼女に安心して、今はもう、どうでもよくなっていった。

「それにしたって君はちょっと無気力すぎだね。週に一度も歌を歌わないようじゃ、交合を断られるよ」

「お前はどうかんだ？ さっきから、思考リンクがユニークすぎる」「気にしないよ。交合で得られる快感素子は強烈過ぎる。うっかり満足して、リンクが止まったら事だね」

「そっ」

「おかげで、パートナーは一人もないけど」

「どこかに物好きはいるさ」

「君がそれだよ。ここ三日間で、二度目のコンタクトを断られなかったのは五〇〇〇人中、君だけ」

「ふーん」

「そこでさ、ひとつ、交合してみない？」

「ユニークなリンクだね」

「子供が欲しいの。きつといいミームに育つよ。出産許可証なら心配しないで。実はこの前、うっかり十五枚ほど腐らせてしまったぐらいなんだから」

「もつたいない」

「そう思うなら協力してよ。君は認知しなくてもいい」

「お前の家系、犯罪者多いだろう」

「心配しないで。父系は綺麗なもんだから」

「……別にいいが、認知はする。教育権は半々だ。お前みたいに不幸な結果にならないように」

「シビれる意見だね。本当、君みたいな真人間がどうしてアタシなんかと仲良くしてくれるのか、謎だよ」

「宇宙に聞いてくれ」

彼女がふきだして、俺は心地よいリズムで鳴り響くその笑い声に目を閉じた。

「でも、もう遅いね。時間だよ」

彼女がゆらりと立ち上がり、髪をかきあげてため息をついた。口元に不敵な笑みを浮かべる。

「ねえ、君はどうして生きているの？」

「さあ。お前は？」

「誰かに逢うため」

「誰か？」

「自分の好きなミームを持っていて、自分のミームを大切にしてくれる誰か」

そのとき、彼女の頭の上に光り輝く輪が現れた。ポートを分解、切断するサイン。しゃれた映像コード。

「君に少しでも何か渡せていたら、幸いだよ」

そう言うってから、彼女は珍しくぼんやりと無言で頭の上の光の輪をしばし見上げ、それからゆっくりとした動作で俺を見た。

口元に薄笑いを浮かべて、彼女は地面の白砂を蹴り上げた。俺に歯を見せて笑ったが、すぐに俺と同じ顔になった。

「逢えてよかった」

俺は初めて、こいつの言葉を聞いた気がした。

足元から次第に形を崩していく彼女を見ながら、首元まで消えか

けたところで、俺は思わず片手を彼女へさし出し、消えてしまった手をつかもうとした。

ついに後頭部が崩れ始めたとき、彼女が口元を動かした。何を言ったのかはわからないが、消えてなくなる寸前の彼女の目は、これまでで一番穏やかだった。それで、俺の手に何かが触れたような気がした。

音楽が消えて、辺りが静まって初めて、ここにつながっている思考ポートが最大回線になっていることに気がついた。俺の中の、興味を失った無数の俺が、また徐々に散り散りになって離れ飛んでいく。

俺は遙か彼方に伸びるオーロラの螺旋階層を数十年ぶりに意識して眺めた。こういう青いことをする気になっただけ、彼女は俺に何かを残していったらしい。何も解けるはずがないのは、わかりきっている。

俺の中にある無数のコロニーの住民たちの中にも、同じようにしている者がいるのだろうか。もしくはこの上に。

どこからか、あるミームが爆発的に増え広がっているようだ。管理者たちが慌てて壁造り。さっきまでたいした価値もないと思っていたものが、今は得がたい宝物になっている。受け手の器によって毒にも薬にもなるミーム。なんであいつは消されただろう。何一つ、確かなものはない。

俺は周りを見渡して、夕陽を三日月に変えた。月の白い光が海に落ち、浅瀬のサンゴ礁から青い輝きになってゆらゆらと吹き上がり、砂浜を跳ねていく。

突然のコール。了承。目の前にミームが現れた。三フェムト秒の喪が明けたらしい。

何か喉元まで出かかった言葉があつたが、寸前でリンク切れした俺は、いつものように、ただ、相手の最初の言葉を待った。

「多元世界統合認識の斬新なやり方があるらしいね。メタ平行多角
メタ思考ばかりじゃ、この世の真理はつかめないぜ」
メタメタ

こいつの言葉は、彼女のとは違った、簡素でリズムのない響きだった。ただ重力に任せて輝くものの周りを回ることしかできない類の。

興味がなくなった俺は目の前の奴から離れて、歩き出した。体を突き抜けていく無数のミームに時折振り返りながら、目が合ったときにだけ軽く会釈を交わして。

あいつのように生きることの意味を見出すセンスは俺にはない。消えるのがつまらなそうだからそうしているだけだ。でも本当は、どっちでもよかった。

しかし、どうしてこんなに空しいんだろう。このミームはなんだろう。

俺は足を止めた。

あいつがどこへ行ってしまったのかわからなくなった今になって、俺は気がついた。今、俺の中に、あいつによく似たミームがある。

ミームは増えて、変わって、伝わっていく。俺はきつと、あいつに惚れていたんだ。

きつと宇宙のすべてのミームに、自分だけが求めるミームがある。

あいつにもう一度会いに行こう。考えるのは、それからいい。

俺はゆっくりと、あてもなく歩き出した。

ミーム…… オックスフォード大学の生物学者リチャード・ドーキンスが、1976年の彼の著書「利己的な遺伝子」の中で作り出した言葉。ドーキンスによるミームの生物学的定義は、「文化の伝達や複製の基本単位」。

(後書き)

お読みいただきありがとうございます。
よかったです感想頂けるとすごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7965/>

ミーム

2010年10月8日14時48分発行